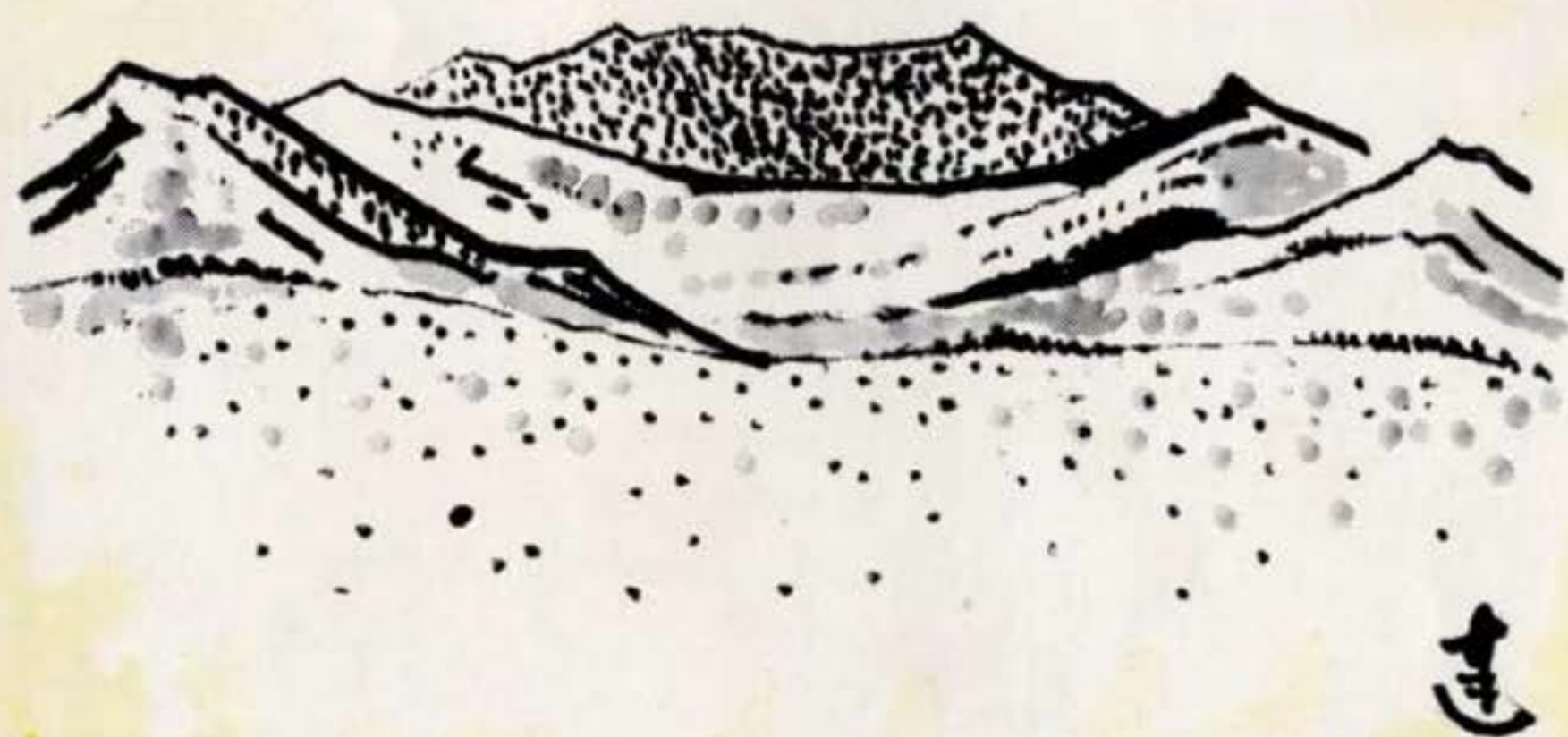


# 浄土

二月号



建

法然上人鑽仰会

昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授承證雜誌第三五二號）  
昭和四十一年一月二十五日 印刷 昭和四十一年二月一日 発行

第三十二卷

第二号



月光菩薩 (国宝)

薬師寺蔵

「月光V」という言葉には優雅な感じを抱かせるものがある。ことに日本人には特異な情緒が織り込まれ、幻想的雰囲気をもてあそびがちである。しかし、月の光は請うと請われざるを問わず、満遍なくいたるところを照らしている。冷徹なほどに照らし続ける。しかも、暗闇を歩もうとする人に行くべき道のありかを示してくれる。このように月の光が暗示する意味はことのほかに多い。

月光（がつこう）菩薩は、差別なくあらゆる人々の上に注ぎ、迷える姿に手を差しのべて、歩むべき道をも教え導いてくれる。さらに冷徹なほどに人の心の動搖をも見守り、見透しておられる。

白鳳時代の銅造としてあまりにも有名な薬師如来の脇侍である月光菩薩。しまったお顔に微塵だに動ずる気色はない。鼻筋の直線、口元の威容、豊かな頬、結髪の櫛目、どれをとっても感歎せずにはいられないほど完璧な造りといってよい。それが完全であればあるほど、きびしい尊顔としてうつってくる。それもそのはず、月光の冷徹な感じが、邪しなわたくしたちの心の動きをとらえておられるからである。毅然とした者に対してはやさしい笑みを浮べた温容と受けとられるから、じつに不思議というほかない。わたくしの投影によって、いつのまにかお像が変わっていることを知らなければならぬ。

（石上善応）



名号はこれ万徳の  
帰する所なり。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙「奥甘利山」松濤達文画

|                           |            |      |
|---------------------------|------------|------|
| 随想                        | 信ヶ原良文・牧尾良海 | (2)  |
| 鎮西上人と泥棒                   | 宮本 文哲      | (4)  |
| — . — . — . — . — . — . — |            |      |
| 浄土問答 念仏すればどんな生活ができるか      | 藤井 実応      | (8)  |
| 無媒随録                      | 須藤 隆仙      | (11) |
| 仏教人生訓 親鸞の信を見直そう           | 宝田 正道      | (12) |
| 浄土のこよみ                    | 大橋 俊雄      | (16) |
| — . — . — . — . — . — . — |            |      |
| 高僧の一面 お酒の好きな日蓮            | 鈴木 成元      | (18) |
| お経の話 極楽は巧言でない             | 村瀬 秀雄      | (20) |
| 家康と三河一揆 (九)               | 鶴田 湛泉      | (26) |
| ご法語をいただく                  |            | (7)  |
| おねはん                      |            | (14) |
| カウンセリング その二               |            | (23) |
| 念仏信仰より創価学会の邪義を破る          |            | (24) |
| 新しい本の話                    |            | (25) |
| 連続話 みんなの法然さま・片目の魚         | 高橋 良和      | (30) |

# その石をのけよ

信ヶ原良文

晩秋のある日、遠来の旧友と天竜寺で湯豆腐を囲み、般若湯で身体を温め苔寺に向う途中のことであった。石運びのトラックが落していったものであろうか、路上に切石の相当大きなカケラが数個ころがっていた。私達の方には子供ずれの家族の一団らしいのが歩いてしたが、突然大きい子が路にしゃがんだかと思うと御丁寧に、転々ところがついている石を三〇糎おき位に一例に並べて、いかにも面白がつて行き過ぎようとした。ところが両親は一向に注意をしようとしな。少々般若湯が手伝ったせいもあるが、我慢がならず、おもわず「ちょっと待ちたまえ」と声をかけた。「おじさんも手伝うからこの石を道路のわきへ動かしてくれ」というと、親子連れはいかにも不服そうに、それでもしぶしぶ石をのけてくれたので、私はこの両親と話し合い

の未知の親子と不思議な縁を結ぶことが出来たことを喜んだのであった。

## 驚覚電

牧尾 良海

### 一

タルドの「流行落下の法則」というものがある。流行は、都会の上流から始まって下に降り、横へ波紋の如くに拡がって行くという意味だそうである。今の地やマスコミのお蔭で流行は都会から山間僻遠にまで電流の如くに伝わって行く。人口密度も騒音も空気汚染度も恐らく世界第一等の東京の混沌の中から余り健康的でない流行が造り出されて瞬く間に拡散されるのである。異常な環境が次第に吾々を陶冶して、環境からの凡ゆる攻勢に対して強い耐久力が養なわれてゆくせい、大ていのことには驚かなくなっているが、恐れるのは当節のエレキ節やゴウゴウである。目をつむり、猿の如く妖しく手を振り腰を泳

由を身に付けねばならない。民主主義も自由も、あてがわれたプレゼントと感じていてはいつ迄も自らのものにはなるまい。

### 二

「道」は、考現学的には、往き来する所であり、山野荊棘をきり開いて人間相互が踏み固めて造りなしたものである。通らなくなれば道たるものは、消えてまう。昔、地方の大名は、自己の領内を広く遠いものに思わせるために、わざわざ道を曲りくねって造らせたということだが、誠におほらかな話である。今や都会の道は、広くなる一方で、往来たつことをやめて自動車の織り成す障壁になりつつある。昔は道で虎や狼に襲われることもあったであろうが、現代の虎狼は自動車である。「どうして自動車に乗っていたか、覚えていない」などと、酔後に青さめて陳述した泥酔運転手と来ては、轢かれた人は全く浮かばれない。東京には百万台の自動車が走っているという。東京大小の道に百万の虎狼が走っていると見立てては無礼であろうか。アスファルトジャングルとはいみじき表現であ

たいと思つて行先をたずねてみた。すると彼等も苔寺に行くのだという。話しかけているうちにだんだんうちとけて、父親は「今の子供はむつかしい」といいわけを言い、すっかり仲良しになることが出来た。私は自分の小僧時代にうけたきびしかった訓練を思い出して物語り、子供の躾や教育のことを話し合つた。

それは私の小学二年の時だったと思う。師匠につれられて田舎道を歩いていたら道路に横たわっていた石をまたいで通り過ぎようとしたことがあった。とたんに「その石をのけよ」と叱られたのである。そして諄々とお説教を喰つたのである。廊下に落ちている紙屑の場合も同様で、叱られるたびに、誰が坊主になんかなるものか、とひどく抵抗を感じたものである。ところがこのような訓練が重なるうちに、いつのまにやら師匠に合掌した気持ちになつてしまつたのである。

こんな話をしてしていると、父親は「みな、大人がいけないんですね」と笑いながら言つた。私は苔寺の方丈でお茶を頂きながら、こ

がせて忘我の境にいる一部の若い人達を見ると、あわれで滑稽であるというより、何が若者をしてかかる陶醉へ誘ひこむのか、考えさせられてしまう。二言めには「希望が持てない」、「イカすし、痺れさせる」、「大人のさまは何だ」と来る。いかなる境遇にあつても、今の日本において希望が持てないというのはどうかと思う。さまの無い大人も確かに沢山存在している。然し、若い、原理的な智慧は、若くて澄んでいるが故にそれを憐れみ見て通り過ぎて明日の己れに期すべきであろう。敗戦虚脱の後遺症がずるずると続いて、理想追求の根性を養おうとしなかつた責めを今、大人達は三思再省せねばならない。日本は、世界で最も自由な国だと思う。フランスで上映禁止の映画も此処では堂々と開映されるし、青少年を毒すること疑いなしの図画出版物も、表現や営業の自由の名によって巷に流れ出ている。天衣無縫で混沌たる自由国である。誠にめでたい限りだが、自由とは、己れの野性を超克して理性的な心意に由ることであるという本義に戻つて、高い・独特な自

る。東京のある警察管内で、昨年中の自動車事故死亡者数の半数までが、出て歩くこと最も勤めた某新興宗教の信者であつたとは、この都会には、神も仏も住めなくなったのであろうか、恐ろしい限りである。「歩けば一時間も二時間もかかるのだから、自動車は有難い。より速くと焦るのは人間の僭上汰汰である。やれる限りゆっくりやつて呉れ給え」と頼んだら、運転手さんが「旦那さんは変つていますね」と笑つて、注文通りゆっくりやつて呉れた。ゆっくり走る運転手さんには、チップを少しでも上げることになっている。機械の恩恵を忘れると、機械は兇器となり、野獣となりかねない。限りある短い生命を長く生きるのも、考え方一つだと思う。兎にも角にもこの東京で健康であることは、稀有の有難いことになりつつある。速度におごり、逆に時間に切りさいなまれる生き方よりは、昔の道のような、おほらかなくねりが欲しいものである。み仏の掌の上をかけ巡つたにすぎなかつた孫悟空の超スピードの飛翔の話は、今日にして特に深い寓意があるのである。

# 鎮西上人と泥棒

宮 本 文 哲

(大本山善導寺法主)



古来より大寺名利は凡そ山頂か中腹か山麓にある。比叡山の延暦寺・高野山の金剛峰寺・京都東山の知恩院等々皆如りである。然るに大本山善導寺は、浄土宗の二祖大紹正宗国師鎮西上人の開基であり、且つその御廟のある由緒正しい名利だが、それが何故か筑後平野のどまん中にある。これに就て善導寺寺録及び善導寺町誌には、次の様な興味深い鎮西上人の逸話が載っている。

元来鎮西上人は天台宗の碩学である。それが不思議な仏縁に恵まれて、三十六才の時、法然上人の弟子となり、常随給仕八年の後、師の印可を得て、いよいよ故郷鎮西に帰るに当り、法然上人は

「汝は法器也。今日迄に一器の水を一器に写すが如く源空が所存皆悉く汝に申し終ぬ。之の外に若し所存あらば梵釈四天王等を以って其の証を仰ぎ奉る可し。」と仰せられ、師子相承の証として選択本願念仏集を特に授与されたのである。如何に恩師の信任が厚かったかを、伺い知ることができる。

かくて故郷に帰った上人は、これ迄の天台宗をやめ、唯一向に他力念仏の弘通に東奔西走されたのである。現在善導寺のある場所は、今から七百幾十年前は平地には珍しい大森林だった。この森を悪用して獐猛な強盗六人が巣くい旅人を苦しめていた。ある日上人が此処を通りか

かると、待ってましたとばかり六人の狼共が現われた。

賊「オイ旅の者ちょっと待った。俺達のナリを見たら大が判るだろう。命まで取ろうとは言わぬ、身ぐるみ置いて行け。」

と例のおどし文句である。上人は別に驚いた様子もなく

「オーそうか」

といいながら着物を脱いでスタスタと行くと、これをじっと見ていた六人は互いに顔を見合せて、

賊「オイ兄弟、何んというくれっぷりのいい奴だろう。

長いことこの商売をやっているが、こんなくれっぷりのいい奴は初めてだ。一体どんな仕事をしているのか、聞いてみようじゃないか。」

とその中の一人が

賊「オイオイ、一寸待て。」

と、上人を呼びとめて、

賊「俺達は長年手荒いかせぎをやっているが、お前の様にくれっぷりのいいに出合ったのは初めてだ。一体お前の仕事は何んだ。」

「俺の仕事か。それは人の持っている宝を教えてまわるのだ。」

宝と聞くと欲深い泥棒のことだ、ごくくと唾を呑み込んで、

賊「人が持っているというからには俺達も持っているだろうな。」

「まあね、お前達のやっている所業は、しわざ犬畜生にも劣るが、ナリだけは人間だから、持っている筈だ。」

賊「それじゃ一つ教えてくれ。」

「よろしい教えてやろう。但し俺のいう通りにするんだぞ。」

賊「いいとも、いいとも。」

「では先ずその帯をとけ。着物を脱げ。」

と次々に脱がせて最後に褌一巻になった。上人が

「それをとれ。」

という賊は

「人の前でこれが除れるか。」

その時上人、声をはげまして、

「なぜとれぬ、牛や馬は褌をしてないぞ。今お前が『人の前でこれが除れるか』といった、その心、それが人間の有もっている宝だ。その大切な宝を有ち腐れにしているのがお前達だ。今にして改心せずば、地獄は一定住家じゃぞ……。」

と懇々と誠まことされた。何にしる学徳共に秀いで、且つ能弁な上人の説誠である、流石の狼共もすっかりまいってしまい

賊「俺達が悪かった」

と慚愧懺悔し、終いに上人の弟子になったのである。

『悪に強かりや善にも強い』

の一例である。上人はこのため此所に足を留める事になったのであるが、この噂は忽ち近郷近在に伝わり、

「オイ聞いたか、あの森の中の狼共が旅の坊さんの弟子になったとよ、何んと思議な坊さんじゃないか、一つ俺達も話しを聞きに行こうじゃないか」

と甲は乙を呼び、乙は丙を誘って、次から次と押しかけたので、忽ち森の中に寺ができ、日増しに來詣人はふえる一方、信者が多くなれば、先づ飲食店や日用品の店が必要となり、更に大勢になれば宿屋も必要となる、という風に、寺を中心にして筑後平野のどまん中にできたのが、今日の大本山善導寺であり、善導寺町である。尤も其後善導寺が大発展を遂げたのは、当時この地方を支配していた草野一族が、深く上人に帰依して多額の財物を寄付したからである。

以上の物語は善導寺寺録及び、善導寺町誌の抜萃である。尚境内の一隅に等身大の石の六地藏が祠ってある。これは六人の今道心の後半生の善行を偲んで、後人の建てた墓標である。その傍に泥棒共が旅人を殺めて抛り込んだと

いう遺跡がある。

抑々上人が凶悪な強盜を教化された根拠は涅槃經の

「一切衆生悉有仏性」

即ち、生きとし生けるもの悉く仏性有り、の經文であることは今更いうまでもない。經文は釈尊の説法であるが、その説法は総じて、對機説法即ち応病与藥である。然らば涅槃經を説かれた当時の印度の社会状態はというに四姓の階級制度嚴として存し、最下級のスードラ族の如きは、畜生同様の虐待を受けたのである。釈尊はこの人権を無視した四姓の階級制度こそ、人類社会を害するものであると、敢然起ってこれが打破に全力を注がれ、そのモットーとして

「一切衆生悉有仏性」

を高く揚げ、此の仏性の前には万人平等である。即ち

「百川海に入れば同一味、人仏界に入れば同仏性」

と徹底的に人種平等を主張されたのである。私は釈尊こそ人類社会に民主主義をもたらしした元祖也と信ずるのである

而して二千年後日本に於て悉有仏性の仏意を体して鎮西上人に依って、六人の泥棒を初め、多くの庶民が勧誡されたのであるが、この事に依って当時貴族仏教、教義仏教と批評された仏教を、庶民仏教、信仰仏教に改革された上人の功績は我國の宗教史に燦然と輝いている。

合掌

## ご法語をいただく

名号は万徳の帰する所なり。然れば即ち弥陀一仏のあらゆる四智、三身、十力、四無畏の一切の内証の功德、相好、光明、説法、利生等の一切の外用の功德、みな悉く阿弥陀仏の名号の中に摂在せり。

### (選択本願念仏集)

南無阿弥陀仏という六字の名号には、すべての徳が集つて一つになっているのです。従つて阿弥陀さまの内面的な、外面的ないさをしとめぐみの一切が名号の中に兼ね備っているのです。

それならその内面的、外面的な徳とはどのようなものであるかについて説明されています。このように詳しく説明をする点が仏教の特色であります。他面からみれば、このように説明するところが、仏教を難しいものにしてしまう弱点となるということができます。ただしここに挙げられている仏教術語は、法然上人の当時には常識的な言葉であつて、故意に難しく説明したものでありません。

四智とは仏さまの四つの智慧のことです。

(一)よく磨かれた鏡には総てが正しくうつるように、一切を正しくもれなく知る智慧で、仏さまの清浄がもたなっています。(二)自我意識がなく自分も他人も等しく考える智慧で、ここから慈悲が生れます。(三)何ものにも妨げられずに観ることができる智慧で、これによつて完全な説法ができます。(四)相手を十分に認識し理解する智慧で、一切を教化できることになります。

三身とは仏さまのお姿を三方面から見たものです。(一)宇宙の真理、万法の本体のことです。(二)すべての真理を体験されたお姿で、目で見る莊嚴された仏さまです。(三)相手により自由に教化するお姿です。

十力とは仏さまの智慧の働きのことです。

即ち仏さまには一切の真理を知り、過去現在未来の因果を知り、正しく解脱への道を知ることの三つの力があります。次に衆生に対しては、衆生の理解能力と実体と自然に歩む因果の結果と信仰内容との四つを知る力があります。そして諸現象の実際と衆生のすがたとはんとの智慧との三つを知る力があります。

四無畏とは仏さまが如何なる論難に対して

も畏れないことをいいます。仏さまは一切の法を知り、煩惱を滅し、従つて真理を己がものとなし、この世の苦から出離する道を知つておられ、この四つに対する自信と自覚のことであります。

次に仏さまの外面的なお姿であります。まず拝見するところの相好には大きな点で三十二、小さな点で八十の優れた形相があるときれていきます。

仏さまの光明は無量であつて、十二の優れた性質があるところから阿弥陀さまを無量光仏とも十二光仏とも申すことでよく知られています。説法はもちろん仏さまの説法で、現在もお説法し続けておられることをいいます。決して過去のことではありません。また利生は衆生に利益を与えることで、お念仏を称することによつてすべての罪障が消え、極楽に往生できることであります。

このように六字の名号には仏さまの一切の功德が集められていますので、お念仏を称えることが他の諸行より優れているというわけを知ることができます。

## 念仏すればどんな生活ができるか

藤 井 実 応

**A**「私は先祖代々、念仏の家なので念仏は大切であると思うて朝夕、お仏壇の前で、少しでも申せるように心がけていますが、なかなか有りがたいところまでにはなっておりません。ほんとうに念仏をよろこんでいる方は、実際の生活を現在どんなにしておられるか、また念仏する人はどんな生活になれるのか、具体的にお聞かせ下さい」（真面目な若い男子の方からの質問）

**B**「私はめぐまれて、ほんとうに念仏をよろこんでいるたくさんな念仏の友があります。それぞれに個性的な独自の行き方をしておられますが、また共通するものもあります。

その人たちにお目にかかって気づかせられることは、第一

に日々生き生きとした生活をしておられることです。その人たちにあうとピチピチした感じをうけます。年をとった人でも老人くさくなく、どこかに若々しさがあります。信仰は真に生きゆくことですからね。念仏の信が実際の生活に現れて、生きゆく力が本来のままに存分にあらわれてくるのでしよう。したがってよくもあんなに働けるなあとと思われるほどよく働かれる、自身の業務を生命と心がけてたましいうちこんでやられる。これは殆ど共通しています。相当の年齢になつて、息子に商売のことはすべてまかせて隠居の形でおられる方もありますが、そういう人は働かんかというのと、どうして、自分の趣味的なこととせられるが、それだけではない。

町会のお世話や、関係ある団体や会の世話など積極的に奉仕的にやっておられる、休む暇もないほどにやられる、一つの菩薩行ですね。しかもやってやるというのではなく、やらして頂くという態度です。時間を大切にしていられるだけやらして頂いて、自分のつとめを果してゆこうとせられるのです。これが第一に気づくことです。

次に念仏の友とよく話あい、交際して気づかせられることですが、いろいろの事件や問題に出あうとき、それに対して逃げようとせず、受くべきものは正しく受けてゆかれる、しかもどんなことでも、それを明るく受けとられる。私の念仏の友の家へドロボウが入ったと聞いてお見舞すると「おかげで一同、生命に別状なくて幸でした」とまことにすらすらかざるところなく自然なすがたで申された、そのお言葉に接し大いに教えられたこともあります。それは一事例で、その他万事明るい面を見失わず、物事を明るく受けとられるから、また明るく処してゆく道も開かれてゆきます。信ある人は問題や事件の起るのを逃げるどころか、その場合進んで迎える位の力強いものが出てくるのではないでしょう。消極的な人も積極的になってゆくようです。それも念仏によって物事を明るく受けとるという態度が生れてくるのでしょう。

第三に念仏者はたえず聞法というか、教を聞いてたえず進

んでゆかれます。年をとってもどこか若々しく感ぜられると前に申しましたが、それはたえず進まれるからですね。法然上人や聖光上人、親鸞上人の御生涯を見ますと、七十、八十、九十と最後に至るまで進んでやまない、益々向上円熟教化息まずとなってゆきます、私共の御手本を見ることが出来ます。信仰は進行なりと聞いています。だから断えず法を聞かれる。仏教で求道者を童子とか若王子とかいう言葉を用いて重んぜられるのもその為です。年はとっても童子の如く、常に若々しく生々と進んでゆく、みほとけの光に照されて、たえざる反省がなされ、自己のすがたが分り、うぬぼれや高慢が破られて、自然に謙虚な態度が生れて断えず改めゆく生活となつてゆくようです。生理的な面の年をとるということは、これは自然で、誰も如何ともすることはできませんが、心もちはいつも若々しく、たえず念仏相続、聞法読経がなされ、改め進む生活となつてゆくのを見るのです。

次に今一つ、念仏の信ある人は、余りくよくよししない。楽天的というか、みほとけにまかせきった安らかさ、おちつきがあるようです。眼の前の失敗やつまづきに、そうくよくよせず前進する、計画は立てるが、今日のことは、今日やれば足りる、明日のことまであれこれと心配する必要はない、明日は明日の風がふく、やるべきことをやってゆけば、如来よ

ろしきにはからいたもう、きつとよくなってゆく、と、さらさらと水の流るるように、物事にとらわれないで、次々とできる丈やってゆく、自然におおらかな明るい、おちついた安らかな生活態度が実際の上に出ております。長生きする人は余り、くよくよしない、楽天的であるということです。だから念仏の信ある人は長寿ができる——勿論宿業によって短命の人もありましょう——この世の寿命の長短はあるが、信あるところ永遠の生命（無量寿）を獲得することが出来ます。

私の常に接する念仏者の生活の一端を申し上げましたが、そのほか長い病床にありながら念仏の中に安らかに養生しておられる方、不況逆境というよりほかない生活におかれながら雄々しく立ちあがって働いている方もあります。今申上げた念仏者たちが、それまでの境地、生活になられるには、涙の谷底とも申すべきところをはい出で、泣くよりほかはない、死ぬにも死なれず生きるにも生きられずというような矛盾、苦しみのドン底を通過して来た方が多いように思われます。はじめから直ちにそのようになれたものではありません。また所謂その逆境中も、たえず真実を求め、念仏相續して処して来られたのであります。そしてそういう境地になつてからも、浮世の風はたえずおしよせて来ます。苦しみ悩み、煩いは堪

えぬものです。ただ念仏の中に、如来寿光裡に、力強く処してゆくことが出来るのであります。

それゆえ、未だそういう生活にまで至りえずとも、念仏の信に入ることができたら、すでに同じ功德を得るのです。山頂に登ろうとする人が、麓の第一歩を踏み出した時、すでに山頂をきわめたと同じ価値を得るのです。その一步を離れて山頂に達することはできません。そのように、阿弥陀仏の本願を信じて念仏申す者は、直下に如来寿光裡に摂め取られてそれぞれ独自の使命を以て往生成仏の大道を一步一步力強く歩みゆくことが出来るのであります。念仏の信に導かれた人は実に人生の至福であります。

業界一の銅瓦・銅板葺一般・模様葺・別製  
金具一式私の先祖の宮及び寺、六角堂、納  
骨堂及び鐘楼の銅材一式手間代も寄進、神  
様仏様へ報恩の奉仕故安く良く、他所には  
出来ない何代も研究せる卓越せる技術故負  
請業者も悔なき様、御相談設計無料。

東京都文京区春日1丁目9の28

銅瓦職協  
相談役顧問  
設計及監督  
電話

石黒工業

(812) 1551

NHKテレビのローカル番組に出演をたまれ、化粧室で化粧をされるのが、なんともきまりわるく、また滑稽でもある。同じ化粧でも札幌の局と、函館の局とでは、仕方が違う。ドーランのぬり方にも濃淡があるし、札幌の方はアイ・シャドーをつけるが口紅を用いず、函館の方は口紅はぬるがアイ・シャドーはつけない。札幌の局は広いので化粧室もりっぱだが、函館の方は建物がせまいので、出演者控室の片すみ化粧場になっている。個別の化粧室では化粧してくれる若い女性と談笑して、きまりわるさをカバーするのだが、控室兼用の化粧場ではなんとも気が落ちつかない。

ところが、このまえ函館の局にいったとき、化粧する間、アナウンサーがうしろからいろいろのことを聞くのである。しかも質問がありきたりの世情ばなしではなく、浄土教における法然と親鸞の違いはどこにあるか、といったような突込んだものであった。

多分私は、「法然は浄土念仏の開祖であり、親はその教えを忠実に実行した実践者で、教祖と信者といってよいのではないか」と答

えたのであるが、「なるほど、それでよくわかりました」とあっさりうなずいてくれたのは、かえって驚きであった。

私のところによくお手紙を下さる真宗本願寺派の勸学高千穂徹乗先生は、念仏は法然のみ祖師であって、親鸞はそれと対立する開祖ではないと主張する。親鸞はひたすら法然の

## 無 謀 随 録

須 藤 隆 仙

教えを守る下僕としての思想よりなく、本願寺教団の教祖になろうなどとは、つゆほども考えていなかったと教えて下さる。

そんなことを聞けば、浄土宗の人は大いに鼻が高くなるような気になるだろうし、真宗の人は、うなずきながらも、やはり抵抗が内心にもち上るであろう。おかしいものであ

る。今日の私たちが、直接、法然上人から、あるいは親鸞聖人から、金を恵んでもらったわけでもなければ、一べんの食事を助けてもらったわけでもない。それなのに、両方とも宗祖をたてるために、内心には大変な意地をはる。文学博士〇〇大学教授などという肩書きのお方でも、たとえば天台の僧籍にあれば、天台の祖こそ仏教中随一として、他宗祖をその配下に位置づけようと汲汲とする。

そんなことをよく考えてみると、宗祖と私たちはやはり親子だ。親子だから、子は「おれの親が一ばんいいのだ」と互に無邪気な意地をはるのである。互の宗祖たちは仏界からこれをごらんになって、呵呵大笑しておられることであろう。そしてまた「よい子供をもった」と喜んでくれるのではないか。

創価学会員と自称する人が、「おれたちの大聖人さまは、きさまたちの宗祖と死にかたが違う」と威張って話しているのを聞いたことがあるが、これもまた可愛いらしいことであつた。

自分も含めて、みな仏の掌上であばれ廻る孫悟空たちなのであろうか。

## 親鸞の信を見直そう

宝 田 正 道

(中央公論社編集・宣伝技術部長)

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうぶりて、信ずるほか別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然聖人にすかされまいらせて念仏して地獄に堕ちたりとも、さらに後悔すべからず候。

——親鸞『歎異抄』——

これは法然上人を師と仰ぐ親鸞が、いわゆる他力信仰の精髓に徹した姿として見られる時、しばしば引用される文句である。一言でいうならば、親鸞が法然上人に対して持った絶対の信頼を現わした心境の告白である。わが師の上人にだまされて念仏信心をし、その上で地獄へ堕ちても悔いはない、という強いよりかかりと、念仏が果たして極楽行の切符か地獄行の切符か、それさえわからぬままに教えに従う安心感。親鸞にこれほどまで深く信頼感を与えた法然上人の人柄や教義の広さ

が、ひしひしとわれわれの心にまでひびいてくるようである。

昨年十二月六日、上野精養軒で催された『浄土』発刊三十周年記念会の席で、福井康順博士は、「法然義」というテーマの記念講演を行われた。「法然義」とは、かりに福井博士自身が呼称していただけるだけで、その命名については多少問題があるかもしれないが、とにかく法然上人の教えは、浄土宗のいわゆる鎮西流だけに限られているかのように思われているけれども、実は、鎮西はもとより、証空の西山派も親鸞の真宗も一遍の時宗も、すべてを含んだ、もっと巾の広く包容力の大きいものである。その点、浄土宗は、自らを「鎮西流」などと狭めて呼んで、大変損をしている。大いに法然上人の教えを広めるならば、むしろ「法然義」の立場をとるべきではないか、というような趣旨のお話であった、と思う。

学問的には、いろいろ論ずる余地のある問題かもしれないが、しかし、たしかにそういわれてみれば、法然上人の教えは、浄土宗に属する人々だけでなく、真宗の人でも西山の人

も時宗の人も、それぞれの源流として仰ぐべき巾の広さと人徳の高さに彩られたものと考えざるべきであろう。法然上人が、鎌倉新仏教の元祖でありながら、案外一般的にその偉大さを知られていないのは、あまりに大きすぎてとらえにくい面を多分にもっているためかもしれない。われわれは、宗史の伝統や系譜を重んずるかたわら、福井博士の指摘されるような大法然教の真髓が、殊に上人の人格に備っていたことを、忘れてはなるまい。法然を忘れて親鸞も証空も一遍もありえないのである。われわれは、単に浄土宗の宗祖としてだけではなく、現代日本の浄土教系信仰の元祖として、仏教徒が教主釈尊を仰ぐ心と同じ気持ちで上人の偉大な教義的人格的巾の広さを、見直し、大同団結しなければならぬのではあるまいか。「信」というのは、疑いに対する意にて、疑をのぞくを信とは申すべきなり」といわれた法然上人の言葉を親鸞一人が守って師と仰いだのではない。われわれ念仏の徒は、一人残らず親鸞のこの語を発した時と同じ心境を、常に持っているはずであり、またもたねばならないのである。狭い宗派根

性にとらわれて、浄土宗の独占と思ったりしている、われとわが手で大きい法然像を小さく握りつぶしてしまうことになる。

人生を歩むにも、われわれはとにかく偉大な師を過少評価して通りすぎるものである。人を信ずる場合において特にその傾向が強い。近頃の師弟関係を見ても、最後まで徹底的にその師を敬い、その跡に随って悔いなき弟子の道をつくす者の、なんと少いことか。大抵いは己れの利害打算の都合によって、ある時は師と信じ仕えながら、ある時はむしろ敵としてこれを超えるような場合も少くないのではなかろうか。師の方でも、親鸞の法然におけるほど立派な人格者がいないためかもしれない。しかし、師弟の道は、あくまで師弟の信によってつながれていなければならない。三尺下って師の影を踏まずとか、弟子、師に従って行くに足をもつて師の影を踏むことを得ず（善見律毘婆娑）などと、孔孟の教えや仏典の各所に説いているが、背くことのやさしく、守ることのいかに難きかは、各人思い当るふしのいかに多いかに驚くことであろう。信は道源、功德の母なり、という。これは

対仏、対教えのみの訓辞ではない。対人間にも十分あてはまる金言である。いや、むしろ人間に対して不信の念のある場合、いかにして仏や教えに絶対の信を捧げるなどという殊勝な心になれるであろうか。今年は去年にひきつづいて不況の波が一層高まりつつある。人の心も相手を信じかねる場合にしばしばぶつかるかもしれない。世界の情勢、殊にベトナムを中心とした東南アジアの動きは、悪化の一路を辿っているようである。しかし、国と国との不協不和も、すべて人間対人間の不信感に根ざす以上、国際的にもまず相手を信ずるところから出直さなければ、何事も平和に解決はできないであろう。師弟間の信頼から進んで人種間の信頼にまでその精神を高める役目を誰がするか。結局は、われわれ宗教にたずさわる個人が、まず仏教徒という立場から、少くとも法然上人を師と仰ぐ念仏信者の自覚を強めて、一人一人、親鸞のような純粹絶対な信心の向上を深める以外に、ないのである。じつと心をすまして、わが師法然上人と、それに殉じた親鸞の信を、もう一度、めいめいが見直すべき時である。

# お ね は ん

○

きさらぎ二月十五日、み仏さまは、サーラ双樹のあいだにあって、最後の日をお迎えになられたのでございます。生きとしいけるものみな、み仏さまの世にとどまることをねがい、身をうちふるわせて、悲しみにつつまれておりました。

み仏さまの死をまねいたのは、鍛冶工の子チュンダのささげた食物でありました。

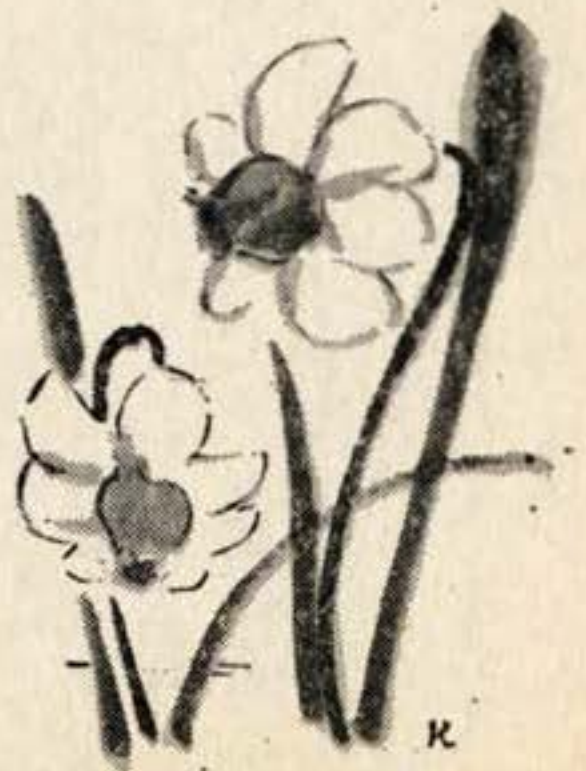
み仏さまは、チュンダをなぐさめながら、お説きになられました。

「かつて、少女より牛乳のほどこしをうけて、さとりをえたときと、いま、チュンダより食物のほどこしをうけて死をむかえたときと、その果報に差別はない。なんとなれば、仏の身は永遠であって、いわゆる生まれ、食し、死す

るのではないからである。」

人びとをして、この世にたいする執着をはなれしめ、生死のながれをこえしめんがために、み仏さまは、死をしめされたのでございます。ゆえに、み仏さまは、みなのおねがいをおさえて、また、つぎのようにお説きになられました。

「仏のひさしく世に住せんことをねがってはならない。まさに世界をみよ。ことごとく、みな無常である。生ずるものは、みな死に帰する。仏は、この世の彼岸にわたり、一切の苦をいで、ただ、この上ない楽をうけるものである。チュンダは、み仏さまはどのような方便のために死におつきになられたことを理解することができましたが、しかしなお、うれいかなしみをなさえることができなかったのでございます。」



み仏さまは、かつて、ヒマラヤ山にあって、きびしい修行にはげみ、雪山大士とよばれたときのことです。そのとき、天人が、さとの重荷に大士がたえられるか、どうか、ためそうとおもい、悪鬼に身を変じて山におりきたりて、つぎのようにうたわれました。

ものみな とどまることなし

これ生の 滅にいたるならい

大士はこれをお聞きになって、心うつものをおぼえて、それはちょうど、のどのかわきに清冷の水をふくんだごとくでありました。

さらに、のこりのうたをのぞみましたが、食にうえた悪鬼は、そのかわりに、大士の身をもとめました。大士は身をほどこすことを約しますと、そこで、悪鬼はさらに説くのでありました。

生滅の つきはてて しじまを たのしみとなす。

大士は、すぐさま、あたりの石や木に、そのうたを書きつけて、木の上から悪鬼のまえに身をなげだされたのでございます。そのとき、悪鬼は、もとの天人にもどり、空中において大士の身をうけとめ、大地に、しずかにおかれました。そして「よいかな、よいかな、まことに、その菩薩にして、生き

とし生けるものに大いなる利益をもたらし、まよいのやみのなかに大法の火をとすものである」と、ほめたたえられました。このような、み仏さまの修行時代についての説話をとおして、なによりも、まず無常を見きわめるべきことが、おしえられるのでございます。

み仏さまは、かようにおつげになりました。

「われ、ものみな、ことごとく無常とみる。因縁より生じたものなれば、無常とする。生じては、かわりゆき、滅にいたる。ゆえに、すべてのものは、ことごとく、みな無常である。無常なれば、これ苦、苦なれば、これ不浄である。また、すべて、みな無我である。我とは、こわれないもの、かわらないもの、独立固定のものである。すべては因縁生のゆえに、我のないことをしる。」

このように、この世の無常、苦、無我、不浄を見きわめることによって、この世にたいする執着をはなれるのでございます。そして、それが、生死相對の現実をこえて、永遠絶対の世界にむかうこととなるのでございます。み仏さまは、うつろかわる、きびしい現実の生のなかで、おこたることなく精進せよ、とおさとしくだされた、最後の遺誡が、季節に味う霜のきびしさにも増して、情弱なところに、生きる尊さを味わせていただくのでございます。

願はくは花の下にて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

西行はどうせ寿命が来て、死ななければならぬとすれば、きさらぎ(二月)の望月(十五日)の頃が良いといっていた。それという

## 浄土のこよみ — 二月 —

### 雄 俊 橋 大

のは、丁度その頃は桜の花が咲きみだれ、うららかな暖かい日ざしがそそいでいるからであらうか。陰暦の二月十五日といえ

ば、今では三月の中旬。寒い地方でも冬芽がほころびはじめ、春待つ鳥の声もきこえて、長い冬ごもりに別れを告げようとする時期にあたっていた。暖かい地方では、もう桜の花たよりも聞けたであらう。新暦の、余寒なおきびしい二月十五日には、そんな風情はあるまい。  
「きさなぎ」というのは衣更着で、二月の

声を聞いても余寒なおきびしく、衣を更に重ねて着ることから、「きさなぎ」と名づけられるようになったらしい。その十五日は涅槃会。この日は釈尊がなくなられた日で、古くから四月八日の灌仏会、十二月八日の成道会とともに、釈尊の三大法会として重んぜられてきた。釈尊がなくなられたのは、衆生点記の説によれば西暦紀元前四百八十六年というから、今から二千四百五十二年前のこと。中インドカピラ国の浄飯王を父とし、マハヤナ夫人を母として出生したゴータマ・シッタラタは、王子として祝福され、何一つ不自由のない生活をおくられたが、長ずるにおよび世の無常人生の苦悩にはいたくなやみ、深く心に潜め、二十九才のとき将来約束された王位をもかなぐり捨てて、出家し沙門となった。沙門となったことは、王位の継承を断念したことを意味している。以来勤苦精進をかさねること六年、ついに正等覺を成じ、初めて鹿野苑で法輪を転じたのは三十五才の時のことであった。それから入滅の時まで四十五年の久しきにわたって教法を説かれた。そして八十才でなくなられたという。もともと涅槃は

吹き消されたことを意味し、罪惡煩惱や、それが積みかさなって、更に人生の苦をまねく働きとなる業が、正しい智慧と修行によって消えさり、再び生れかわり死にかわって、罪をかさねることがなくなったことをいうのである。釈尊は、すでに成道したとき悟りを得、仏陀(覺者)となったのであったから、このとき涅槃を得られたのであらう。しかし涅槃を得られたとはいふものの、なお肉体的な束縛はのこされていた。そこで成道のときの涅槃を有余涅槃といい、肉身が死滅して精神的な活動もできなくなったときを無余涅槃と呼んで区別している。そのとき釈尊は、弟子たちに最後の教えを説き、頭北面西して世を去られた。涅槃会にかざられるお絵像には、釈尊をとりまく弟子たちや、天竜鬼畜も、地上に住む動物ですらも、顔をおおい、或いは地にふして、永遠の別れを歎き悲しむ姿がえがかれている。

涅槃会や鍬手合はする数珠の音 芭蕉  
きさらぎの日和もよしや十五日 鬼貫  
お涅槃やとりわけ花の十五日 一茶

関通型といわれる建物や仏具がある。丸味をおびた質素で、しかも簡潔な形をしている。多くは宣徳の銅器などに用いられているが、鶴沼本真寺のようになだらかで、かどをもたない女性的で、スマートな堂宇を、まま見かけることがある。これも関通型である。関通上人好みの型式であるから、関通型と呼ばれるらしい。関通は元祿九年（一六九六）四月尾張に生れ、十三才のとき専徳寺呉峰について得度した。彼は法然上人に深く帰依して、ひたすら念仏を修すると共に、当時名利を求め立身をのぞんでいた僧界をするべく批判し、どこまでも法然上人の歩んだ道をたどろうとなされた。四十八年の間、諸国を巡錫し寺院を創建すること十六か寺、得度の僧尼千五百余人、教を説いて念仏をすすめ、日課を誓約した男女千万人にも及んだという。

関通の流れは関通流とよばれている。この流れの人たちは専ら念仏の一行を修して、質素清酒な宗風をおこした。徳川家康が浄土宗に帰依して以来、宗侶を優遇したために生活は奢侈に流れ、衣服にしても香衣の色をほこる人が多くなってきた。法然上人が黒衣をま

とい、念仏をつづけた生活とくらべれば、彼らの生活態度は、あまりにもかけはなれていった。このようにして身の出世を求め、念仏を第二義的なものと考え、日々をおくる人の多くなったことに心をいたため、せめて心ある人たちだけでも法然上人の昔にかえった生活を



聖光上人像 善導寺蔵

したいと念じていた。このような人たちの集まりが捨世派であり、関通流であった。関通は明和七年（一七七〇）二月二日世を去られたが、この流れから輩出した高僧も多い。大日比三師も、山下現有もその一人であった。そして二十八日は、筑後善導寺の「おみゆ

き」。開山聖光上人の木像は興にのって、本堂から薬師堂に移られ、一夜ここで明かし、翌日おかえりになる。二十九日は鎮西聖光上人の忌日。聖光は応保二年（一一六二）五月筑前国香月庄で生れた。七才のとき菩提寺の妙法に師事し、十四才で剃髪。白巖寺の唯心や明星寺の常寂について教えをうけたが、その学問は天台の教学であった。ここで学ぶと八年、寿永二年更に比叡山に登って研鑽にいそしんだ。建久元年一時故国に帰ったが、同八年再び上洛。時に縁あって法然上人をたづねられた。ここで浄土の要門を聞き、翌九年選沢集の付属をうけ、帰国の後ち高良山厨寺で宗義をひろめ、建暦二年善導寺を建立。嘉禎四年（一二三八）閏二月二十九日、七十七才で世を去られた。

法然上人に和順大師の号が宣下されたのは、三十六年二月二十七日であったが、明照大師の号も明治四十四年二月二十七日の宣下。それ以前は正月十八日に宣下されるのが通例であったらしい。

## 蓮 日 好 きの 酒 お

元 成 木 鈴

日本に高僧は多いが、その中で日蓮ぐらい手紙の上手な人はいないだろう。彼は非常に筆まめで沢山の手紙が残っているが、実にみあげたものである。

蒙古の来襲を予言し、身延入山した日蓮の住居は、木の下に木の葉をしきつめた、月がさしこみ風のふきぬけるアバラヤという。また春はわらび、秋は木の実を拾って腹を満たし、雪深い冬には紙小袖に赤ヅキンで通したため身はさけ、生き地獄そのものであったという。

このように日蓮の諸伝記は伝えている。信者はそれを信じ、寒中に荒行を続けている今日ではあるが、それは日蓮の手紙をそのまま信用するからである。手紙は良質の史料ではあるが、書いてあること全部が信用できるものではない。今日三百通余も残っている彼の手紙をよく読むと、むしろ贅沢な生活であったと私は考えている。

身延の日蓮のもとには銭・衣類・米・麦・餅・酒・油をはじめ、かわのり・柑子・菰・わかめ・いも・大根・豆類・わさび・塩・味噌・かき・なし・こぶ・菓子・瓜・くり・あ

め・なすび・すりどうふ・くすり・扇・紙・墨・馬・筵・盃・器・炭・はじかみ・のり・酢・たけのこ、など、いろいろなものが月二度ぐらいとどけられた。それらに彼は一々礼状、というよりも教義をおりこんだ受取状をかいた。それらを総合して考えると、彼は不自由な生活ではなかったが、贈主により以上の喜びをあらわすため、不自由を訴える手段をとった。誠に効果的で、信者でなくとも再度送ろうという気持をおこさずにはいられない巧みなものである。

日蓮は若いころから胃腸が弱かった。神経質な性格と環境がそうさせたのかと思うが、身延入山後はずっと下痢が続き、それがもとで栄養失調になり、六十一歳でこの世を去った。こんな状態の中であれだけの活動が続けた日蓮はやはり常人ではない。

日蓮は非常に酒が好きであった。贈られた品物の中には、「聖人」「さけ」「古酒」「千日」「清酒」「小筒」と、清酒と濁酒を区別した酒名が注意をひく。しかも酒をもらったときの日蓮は、多忙であろうと、病気であろうとすぐ返事を書いている。いかにも酒好き

な人間性がでてゐる。

弘安四年十一月八日に、檀越<sup>だんごつ</sup>の上野時光の母にやった札状は彼の一面をよく物語っている。それには、

自分は身延に入ってから八年間病氣(下痢)が続き、一步も山を出たことがない。とくに今年は春から冬まで増々ひどく衰える一方。今月の十日間は食も止ってしまった。その上、雪が積り、大変な寒気で、体は石のように、胸は氷のように冷たくなった。このように自分は重病であるが、貴女<sup>あなた</sup>が贈ってくれた聖人<sup>すんぎん</sup>をあたたため、口でかつこう(漢方薬)をくいちぎって一口飲んだところ



日蓮木像(池上本門寺蔵)

ろ、たちまちのうちに胸は火をたいたようになり、体全身に廻ってほかばかとなり、汗がしたたるようにでてきた。ちょうどそれは、汗で垢<sup>か</sup>を洗うようでもあり、また裸<sup>はだか</sup>で足を洗っているようでもある。まるで、のんびりとお湯にでも入っているような気持ちでありがたい。

といっている。

重病で何も食べられなかった日蓮は、喜こんで酒を飲み、すばらしい札状を書いている。

一カ月前には大檀越の富木胤継にも重病といつて手紙を略した日蓮である。お酒の好きな人は、二日酔で青い顔をしていても、赤い提灯<sup>ていとう</sup>のともる時分になると元気になり、「酒は百薬の長」とか「カンロカンロ」などといってオダをあげる。まことに面白い。日蓮は薬とともに飲みほしたのかもしれないが、この場合はむしろツマのような感じである。

近ごろこわい病氣は何といっても癌。酒・煙草などいろいろ害はあげられている。とくに胃腸癌の恐れの場合はアルコールを禁止するのが常識である。いかなる好酒家も宣告を受ける素直に聞きわけ。やはり死は酒よ

りおそろしい。

日蓮は慢性胃腸カタルというところであろうか。これでは栄養失調は当然。寒さには一層こたえたろう。そして酒は唯一の栄養源であつたろうが、今日の医学で考えれば、かえって死期を早めたのとれないこともない。しかしいくら栄養源といつても、酒のきらいな人は飲めるはずはない。彼が好酒家であつたことは名文章によつて実証<sup>じしやう</sup>づけられる。日蓮がここに記している表現は、酒の好きな人でなければできない、本当に体験からにじみでた文章である。しかも彼は、

病氣のために近ごろは誰にも返事を出してないが、貴女<sup>あなた</sup>にだけは別だ

といっている。彼の喜こんでいる様子が目にうつるようである。日蓮の文章のうまさは何といつて賞<sup>ほ</sup>めてよいやら、表現の方法を知らない。翌年になると病氣はさらに悪化した。彼は寒い冬がくる前に常陸<sup>ひたち</sup>へ湯治をこころざし下山したが、武蔵<sup>むさし</sup>の池上宗仲の家で死期をさと、本弟子六人を定め、六十一歳の波乱に富んだ一生を終った。遺骸は茶毘<sup>だひ</sup>にふし身延に葬られた。

(お経の話) その一

——阿彌陀經(上)——

極樂は巧言でない

村 瀬 秀 雄

一、近くて遠い極樂

阿彌陀經は淳朴であつて、一番親しみ易いお経であります。その記述が簡明直截であつて少しもふん飾めいたところがなく、また難しい哲理といった議論めいたものがありませぬ。これが阿彌陀經の特色であつて、大切なことでもあります。

阿彌陀經は型の如く、最初にこれを説いた場所とそこに連つたお弟子たちを記してから本文に入ります。そしてその冒頭に

「これより西方十万億仏土を過ぎて世界あり。名づけて極樂という。その土に仏まします。阿彌陀と号したてまつる。いま現にまします。説法したまえり」

とあります。即ち初めに阿彌陀さまのおられる極樂の方向と距離を明かにしています。

キリスト教では最初に天と神があつて、この神が光や空や大地を創り、やがて人間や動物を創つたと教えています。しかし仏教の極樂は全く違います。多くの仏さまたちは、それぞれご自分の国土をつくられました。だから仏の国土は仏の数だけあるわけで、四方八方上下の各方向にそれぞれの仏国土があります。そこで阿彌陀さまは、二百十億にもほる多くの仏国土をご覧になつて、その最も優れている個所をとつて、ご自分の極樂をつくられました。極樂は一定の方向と距離のところにあるということになります。

そこで阿彌陀さまの極樂は西方にあると、まず方向を示し、次に十万億の仏土を過ぎた世界だと距離を明かにしてあります。この距離について、望月信亨先生は

「極樂世界は、この仏土の数、十万億を過ぐる所にあり。然るにこの十万億の仏土とは、即ちこれ宇宙法界を尽せる仏土の教なり。法界無尽なりと雖、虚空無辺なりと雖、而もこの十万億上の外に世界あるべからず」

と、大宇宙の最も遠いところであると説いています。一仏土というのは三千大千世界のことです。太陽と月とが運行するこの世界を小千世界といいます。小千世界の千倍が中千世界、そのまた千倍が大千世界、そのまた三千倍が三千大千世界であります。望月先生は蓮華藏世界という仏教の宇宙観と比較して上述の通りに説明されましたが、宇宙とか星雲とかいう考えが一般の常識となつていゝる今日といえども、仏教の描く世界の構想の雄大さに驚くのであります。仏教において永遠とか無限とかをどのように受けとめていたかを知るべきであります。

しかし一方には、心が不浄であれば、その

人の見る世界は不浄であり、心が清浄であれば、その人の見る世界は常に浄土であると説く「心浄不浄の説」があります。太陽や月の光といえども盲人に見えぬように、浄土がそこにあっても、不浄の人には見ないことと同じであるといえます。この考え方から次のような説がでてきます。

「夫れ極楽遠らずして、十万億仏土の西に構へ、弥陀おのが心にありて、一度華台の形を現すといえり。故に極楽遠らずとは仏智の所見なり。十万億仏土とは凡夫引接の巧言なり」

しかし極楽ははたして仏さまの巧言なのでしょうか。なるほど観経には極楽は決して遠くないと説かれています。即ち経文には

「そのとき世尊、韋提希に告げたまわく。

汝いま知るやいなや。阿弥陀仏ここを去る」と遠からず」

とあります。この点について善導大師は三つの点から説明しています。第一には十万億仏土を過ぎた所というのは、一つの数量であって、決して無限に遠い所との意味ではないこと。第二には距離こそ遠いが、往生する場

合は僅か一念にして直ちに往生できること。

第三には浄土を觀すれば、この身この世で浄土を見うるということ。この三つの意味があるとされています。従って法然上人のお言葉の中にも

「ただふかく本願を信じて念仏申さば、一念須臾のあひだに、阿弥陀ほとけの来迎にあづかるべき也」

と仰せられています。ただしここに来迎とあるのは臨終の際の来迎でありましょう。お念仏を称えて極楽に往って生れると信じているのですから、極楽について何んとしても自分で納得しなくてはなりません。そこでもう一つ福田行誠上人の言葉をみたいと思います。即ちそれは

「彼の浄土の信というも、まず極楽を信じてからのことなり。極楽は阿弥陀経には是より西方十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽という、滅法に遠く説けるを、觀無量寿経には、ここを去ること遠からずと説けり。故に舍利弗は座敷の唐紙を見るが如くにこれを見たまう」

と「信の事」にあります。

そこで極楽は三界を超えた世界であるとみたいのであります。三界というのは欲望が支配している世界、すべてが有限である世界、欲望がなく有限でない理念の世界の三つであります。これらを超えた世界は絶対の世界であります。遠くて近い世界ではなくて、近くて実は永遠な遠い世界であります。経文に記されてある通り十万億の仏国土を過ぎた彼方にある世界であります。

さてこの極楽に今も尚、阿弥陀さまは説法し続けておられるのです。決して極楽にあって鎮座ましましていただけではありません。現在衆生のために働きになつていいます。阿弥陀さまは常に説法しておられますが、また念仏行者のために瞬間にしてここに来られる働きをなされます。ここに阿弥陀さまの有難い特色があるといえましょう。

## 二、簡素な極楽の描写

次いで経文は

「かの土を何が故に名ずけて極楽となす。その国の衆生、もろもろの苦あることなく、ただもろもろの樂のみを受く。故に極楽と名づく」

と名前の説明をしています。

苦しみというのは寿命の短いこと、疾病に悩むこと、衣服や飲食に不足すること等でしよう。地獄の苦しみ、餓鬼の苦しみ、畜生の苦しみ等もあります。こうした多くの苦しみの正反対のことがらが楽であります。

極楽は阿弥陀さまがお創りになった世界です。すから、どのような世界であるかを説明しなくてはなりません。そこで経文は聞くものをして心温まる華麗さを以て極楽を描写しています。ただし華麗さといっても無量寿経や観無量寿経のように詳細にわたっての説明ではありません。この点かえって簡素な描写であるというべきです。

極楽にあるもの、木、建物、大地等はすべて金銀宝石を以てできています。池には蓮華が咲いていて、青、黄、赤、白の色を放っています。空には美しい鳥が音楽をかなで、風すら微妙な音を出して木々を吹き抜けてゆきます。人々は常に仏法僧を念じています。

さて阿弥陀さまはどのような仏さまかというと、光明が無量であり寿命が無量であると説かれています。しかし阿弥陀さまは、もと

法蔵菩薩といわれたので、何つの日にか仏さまになったわけです。その年代は今から十劫の前だとあります。これは一応数字を以て時代を表現していますが、数えて尽せない大昔と申す外に言葉がありません。例えば一劫という長さは、四十里立方の大きさの城に芥子を一ぱい満し、三年毎に一粒の芥子を取り去ってゆき、その城が空になるまでの年であるといえます。

とにかく大大昔に成仏され極楽を創られたわけですから、そこにいる人の数も無量であってしかも不退転の位についていずれば仏さまの後をつぐ人々であります。

このように極楽のことを描いています。これらの一つ一つをとってみれば他の經典にも説かれていることですが、このように括めて極楽を説いたのは、阿弥陀経が初めてであります。

この点からみてこの極楽の描写は最も古いものであり、基礎的なものであるといえます。

## 浄土トラクト紹介

村瀬 秀雄 編

### 浄土宗檀信のおつとめ

檀信徒のための日常勤行式に解説、訓読を行ない、真意が会得できる様にし、又檀信徒として心得るべき点を略述し、日常生活のよりどころとなるやさしいお経。

価 九〇円 送料 二〇円

安居 香山 著

(大正大学助教授)

### 四季の寺まいり

— 浄土宗寺院の年中行事 —

修正会・御忌会・涅槃会・鎮西忌・善導忌・彼岸会・宗祖降誕会・花まつり・記主忌・お盆・お十夜・成道会の由来、意味を簡明にあらわし、加えて弥陀信仰への導びきとなる好著、写真多数入り。

新書版二〇頁 価 二五円 送料 一〇円

## カウ　ン　セ　リ　ン　グ　　その二

カウンセリングとは、次に述べる四つの内容を含めて申します。

### 一、心理療法のカウンセリング

狭義のカウンセリングとはこれでありまして、パーソナリティの内面に欠陥を持つものの治療であります。すなわち精神治療でありまして、ノイローゼの治療等を云います。具体的には、夜、眠られない、人前で話しが出来ない等、問題のある欠陥のある人の治療であります。

### 二、問題の解決、助言、指導のカウンセリング

カウンセリングは、第二の場合が一番多いのであります。非行、進学、家庭不和、人権、失業等、社会生活の問題の助言のカウンセリングであります。これは、問題解決のための相談、助言であります。これは、或る程度、専門家でなくても人生の経験豊

富な人は出来ますし、常識的な答えが出て来ます。

### 三、コミュニケーションの技術

これは、会社、組織集団内での人間関係を調整する技術であります。労務管理等、企業体に働く人々を如何にうまく使い生産能力をあげるか、勤労意欲を如何にあげるかと云うことであります。これには、労働条件、厚生施設を改善することでありますが、ただこれだけで生産能力があがるかと云うと、ただこれだけでは不十分であります。職場の人間関係の調整がうまくゆくかどうかと云うことで、かなりの差が出て来ます。この人間関係の調整が重要で、このためにカウンセリングが使われるのであります。すなわち、コミュニケーションは、人と人との結びつきをつけてやることであります。

### 四、教育技術として行うカウンセリング

これは、スモールグループ小集団の活動や、グループカウンセリングの応用でありまして、小集団の中で、自分の内面の欠陥を気づかせ、自分の欠陥を矯正させ自分の変化を自覚させる方法であります。この方法は、学校以外でも、産業関係、経営者ゼミナールでも、グループカウンセリングの方法が使われています。良き経営者は良きカウンセラーであることと云われています。これは、教育者や経営者に限らず、宗教家についても云えることであります。

現在、第一の心理療法、すなわち、パーソナリティの内面に欠陥をもった人の治療にのみ限定する狭義のカウンセリングは別として第二以下の方法は、仏教においてもやり方は違っても、古くから行われた方法であり、今後はこの技術をマスターして大いに教化に利用していただきたいと思ひます。



## 念仏信仰より創価学会の邪義を破る

——法華經の再発見——

一、法然上人が後日の邪儀を防ぐ為に一枚起請文をお遺しになったのと同じ信念で日蓮上人が「まんだら」を書いたものである。

二、「まんだら」には中央に南無妙法蓮華經、その左に南無釈迦牟尼仏、その下に日蓮の名がある。これは日蓮の教えの総てが釈尊の教えである妙法蓮華經と釈尊御自身であるので、妙法蓮華經と釈迦牟尼仏に帰依せよとの信念で南無を附けたのである。

三、釈尊は御自身「仏」であると認めて発表したのが、日蓮は自身「仏」である事を認めていない。それ故「まんだら」には日蓮仏としてないし又、日蓮に帰依せよと南無が附けてないのがその証拠である。

四、故に仏と称せられるのは釈尊只一人であり日蓮は仏ではない。

五、法然上人は大慈悲に依り観像念仏と観想念仏を捨て無念無想の念仏が最も正しいものである事を教えてある。これは般若心經に説く空に直結するもので、念仏を唱える事に依り巧みに仏教の真髓に到達出来る様に導いて居り、更に信者は日常生活に即した上人のご法語に依り正しい仏教を完全に体得する事が出来る。故に浄土教

が仏教を最も正しく継承しているものと云える。

六、日蓮上人が題目を唱えさせたのは、法然上人の念仏とその目的は全く同じであると思うが、日蓮は法然上人の慈悲の様にその唱える心構えを教えてなかった為、今日の様に鳴物入りで騒ぐ全くでたらめで、本来の正しい仏教に

全く正反対な目的の題目になってしまったのである。故にこの様な題目の唱え方では一生かかっても何の功德も得られない。

七、創価学会では釈尊を過去仏として無視しているが、釈尊を無視した場合、そこに仏教はあり得ない。日蓮自身「仏」であると言明していないものを何百年も経た今日仏であると云ってもそこには何の根拠もない。迷い言に過ぎない。従って創価学会では釈尊を無視し、更に「釈尊とその教えに帰依せよ」と教え遺してある。日蓮の信念さえも無視しているので、実際には創価学会は、日蓮宗に全く関係なく、勿論仏教の団体でもない只の政治団体に過ぎない。

八、若し創価学会の主張が総て正しいとするならば「まんだら」に書き遺してある日蓮の南無釈迦牟尼仏の信念は正しくない事になる。

九、創価学会では「まんだら」に小さく書いてある人々の名は「その人々が妙法蓮華經と日蓮を守ってくれている」と説明しているだけなので、それ以外の意味は全くわからず、誰の名が書いてあるのかさえも知っている人は極めて少ない。而もそれを「御本尊さま」として毎日拝ませているのである。

一〇、法華經の修行は余りに難行道である為、如来寿量品に「以何令衆生得入無上道速成就仏身」とある如く法華經の教えでは釈尊の力を以ってしても大願成就出来なかったのである。然し、観無量寿經に念仏に依る易行道が説かれて、大願成就した事が明らかにされている。

十一、故に現在間違つて信じている創価学会の人々にこれ等の真

実を繰り返し説明し、正しい浄土に救い出して南無阿弥陀仏の念仏に導く事が浄土宗人の今後の責任である。

十二、創価学会の人は、經文の中より種々の言葉を引用して浄土教を批判しているが、それ等の解釈は「まんだら」を正しく読んで正しく受継がなかった所に原因があるので、「まんだら」を正しく受継いだ時、自然にその批判は全部解消してしまうものである。

「愚者は愚者にて念仏申す」

「念仏申す機は、うまれつきのまゝにて申す也。さきの世の仕業によりて、今生の身をばうけたることなれば、この世にては、えなおしあらためぬこと也。たとえば、女人の男子になればやと思えども、今生のうちには、男子とならざるが如し。智者は智者にて申し愚者は愚者にて申し、慈悲者は慈悲ありて申し、邪見者は邪見ながら申す。一切の人、みなかくの如し。さればこそ、アミダほとけは、十方衆生とて、広く願をばおこします。」

### 「ものいう石」

築地 泰賢

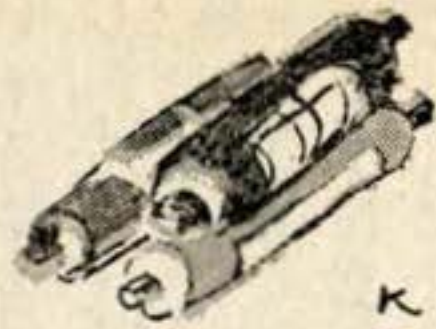
「死ぬこととみつけたり」にも通ずるものであることを一言したい。「宗教の目」人間存在の危機ということ。又科学の偉大さ無限さをそのまま人間性のうえにスリかえてあたたかも、人間性が偉大であり、無限であるかのように錯覚をおこしているのである。ということ。この一章は何回でもくりかえして読む価値がありました。

「愚者は、愚者にて念仏する。ここに念仏の本当のとなえ方があるのであります」と言われる竹中先生の言葉をまつまでもないことであります。

(価、一五〇円、本会)

## 話の本のい新

「葉がくれ論語」の「武士道とは死ぬこととみつけたり」この言葉は戦前、戦中を限らずよく耳にする言葉であります。これに對し正岡子規の言葉を引用して「仏教のさとりというものは、平気で死ぬことではなく、平気で生きることなのだ」こういった意味のことをいっております」とありましたが、これは大した事だと思ひます。仏教とはほんとにこの苦悩のどん底にあつて平気で生きぬくことを教えて呉れるものでないでしょうか。又これは「死ぬこととみつけたり」にも通ずるものであることを一言したい。「宗教の目」人間存在の危機ということ。又科学の偉大さ無限さをそのまま人間性のうえにスリかえてあたたかも、人間性が偉大であり、無限であるかのように錯覚をおこしているのである。ということ。この一章は何回でもくりかえして読む価値がありました。



# 家康と三河一揆

鶴田湛泉

## 九 上和田の激戦

剛の者と聞えた大見、石川、佐橋等三人までも討たれてしまったことは、一揆にとっては大きな打撃であつたし、又士氣に及ぼす影響も軽くはなかつた。

そこでこの頽勢をいち早く挽回せんものと、土呂、針崎、野寺の一揆の首領が合同して、

「いつまでも、こんなことをしてはなるまい。今度三ヶ寺の一揆の兵一団となつて、大久保党の立て籠る上和田の砦を攻め抜き、その勢に乗じて岡崎城へ攻め寄せようではないか」

かう軍議が一決すると正月十一日、蜂屋半之丞が将とな

つて八百余の多勢を卒い上和田へ凄まじい勢で押しよせ、がっちり包囲すると砦の木戸へじりじり進み、一挙に攻め落さんものと、火の弾となつて攻め立てて来た。

物見矢倉では、岡崎城へ告げるホラ貝が「ボオ、ボオ」と各空にけたたましくコダマしていた。

砦を守備する大久保党は、いずれも戦いなれた老練の勇士ぞろいとして、いざござんなれ、と士卒を励まして矢鉄砲を打ち放つたので、攻めよせる一揆の兵もバタバタと倒れて行つた。けれども犠牲を物ともせず、尚も矢弾をくぐつて勇敢に城壁にとりつき、蟻のようにはい登ってくる敵も少くはなかつた。上では石駱さくとして、かねてくくりつけて

あつた岩石の綱を切つて落すと、途中まで登つて来た敵はもんどり打つて落下して行つた。

頃はよしと、忠勝初め大久保党、それに杉浦、松山、市川、田中などと云う一騎当千の荒武者、砦の門をさつと開いて打つて出ると、群がる敵中に馳せ入り追ひ立て攻め立て、ここを専途と奮戦した。

大久保忠勝は弓手の脇を射られたが、矢を引き抜くや否や、その矢を相手の敵に射返した。

一揆は多勢のこととて、斬られても討たれてもいささかもひるまないで、新手を入れ替えさし替え執拗に戦つて来た。奮戦していたさすがの大久保党も疲れが見え出し、忠勝の従弟、七郎右エ門忠世を初め薄手を負う者が現われ出したのであせり気味となつて来た。

幸いその場へ、急襲を告げるホラ貝の音をきいて、上和田と岡崎との中間の六名村方面から馬に汗して土屋甚助、筒井甚六等十余騎が馳せつけて来た。

「只今、岡崎勢、数百騎が後詰するぞ。その先鋒たる我等が高名するを上和田の方々よく見置き、後日の証人に立たれよ」

こう呼ばれる声に、一揆は、

「すはや岡崎から後詰の人数が来るぞ。前後に取り囲ま

れては一大事ぞ」

忽ち動揺し初めた。

一方岡崎城では、相図のホラ貝のいつにない烈しさを耳にした家康は、武具に身を固める瞬時もおしく心せき立てられたのか、鎧を取つて着ながらあわただしく走り出で、門前でやつと鎧の高紐をしめくくり、甲のしのび緒を結んであわただしく馬に跳び乗った。

余り急なこととて、左右を見渡しても誰の姿もない。

「チエーッ！」

側面を立てているところへ、やつと馳せつけて来た宇津与五郎、矢庭に轡にとりつくど駈け出した。次いで馳せて来たのは戸田三郎右エ門ただ一騎だけである。家康等は、疾風のように、大和田へ馳せた。

暫しして、その後からおいおいに寛図書之助重助、内藤三左エ門信成、阿部善九郎正勝、鶴殿十郎三郎長祐等三十八騎が、ようよう家康に追いついて来た。

家康の出現に大久保党は、士気を取り戻し勇み立ち、ここに更に烈しい遭遇戦を展開した。

一揆勢はじりじり退き初め、三丁余も後退してしまった。爛々たる目を光らせた家康は、采配高く振って、

「それッ、かかれ者共！」

と、下知した。

それとばかり旗本衆は、追討をかけて行った。

真っ先に進んだ中根喜蔵、名乗をあげると渡辺半蔵守綱、小躍りして立ち向って来た。双方暫らく槍を合せていたが、勝負がつかないと知るや、半蔵は槍をすて刀を抜いて中根に切りかかって来た。中根も槍をすて刀で応じた。はげしく切り合って、双方とも痛手を負うてしまったので左右に分れて行った。

引き退いて行く半蔵を追うた家康の近臣、鶴殿十郎三郎長祐、

「引くな半蔵、きたるし」

声をかけて槍をつけた。

手負うていた半蔵は、鶴殿のため再び手負された。この時、半蔵危しと見るや父の源五左エ門高綱、

（我が子を討たせてなるものか）

横合から鶴殿に突いてかかって突き伏せると、首をはねてしまった。

目の前で、近臣を討れる様子を眺め激怒した家康は、背を裂き馬を煽って、

「おのれ高綱、勘弁ならぬ」  
槍を提げて迫った。

「おお！」

と高綱は血に狂ったように、家康を首にせんものと猛然と襲って来た。

海道一の弓取と称された家康は、弓馬、剣法、鉄砲さては水泳といろんな武芸に通じていたのであったが、さすがに戦いつかれて来たのか、高綱のくり出す穂先を防ぎかねて来た。

その時、高綱の甥で、その甚一郎と名乗っていた内藤四郎左エ門正成は、家康の危難に驚いて「今は捨ておけず」と、弓を取り直し、叔父の高綱を射倒さんものと放った。その矢は、見事高綱の股を射貫いた。高綱がよろよろと倒れかかると、父の危急に半蔵、我が身に数ヶ所の深手を負いながら馳せよって父を肩にし、倒れては起き起きては倒れながら、救い出して行った。

宇津与五郎は、一揆の大将蜂屋半之丞と槍を合せていた。間もなく二人は槍を捨てると、むんずと組んで上を下へともみ合っていたが、名に負う蜂屋の大力に抗しかねて、終に討たれてしまった。

家康は戦の始めの程は采配を振って指揮していたが、戦いが烈しくなってきたと、拳でもって鞍の前輪を力一杯叩いて、

「かかれ、かかれ者共！」

と、下知していた。

こうして火の玉となって声をからして下知しながら、多勢の一揆の中を單身、或は槍をしごき或は大刀を振って前後左右、縦横無尽に馳せめぐって再三再四危険にさらされている家康の姿を眺めて、勝鬨等の一揆に与していた土屋長吉は、戦のさなかにあつて心の矛盾をばげしく感じ初めていた。

（自分は宗門のため一揆に与しているが、今日の前に主君の危難を見ながらすてて置いていいものであろうか、武士として主君を見殺にするのは人倫にも逆くものである。たといこの身は焦熱地獄に堕ちるともいってはならぬ）  
こう決心すると、義憤を感じ武者振いしながら、鋒を逆さにし俄然一揆の中へ切りまくって行った。

驚いた一揆勢は、

「すわ、裏切者を叩き斬ってしまえ」

面喰いながら忽ち群がりよって来た。多勢に取り囲まれながら、土屋は猛虎の如く戦っていたが、終に深手を負うてしまった。

戦終つて戸板で上和田の砦に運ばれて行く土屋の手を、親しく握った家康は、

「土屋、今日はこの家康も既に危かりしに、我が命を助けてくれたそちの忠義の働きは決して忘れぬぞ。傷の手当を十分致せよ」

嘆惜の涙と共にいたわった。

うれしげにはほえんで土屋は、家康に掌を合せていたが、やがて息絶えてしまった。

一説には、一揆の武士が家康に狙を定めて鉄砲の引金を將に引こうとしているのにふと気付いた土屋は、「あ」と叫んで走りよつて家康の前に立ち塞いだ。と同時に、筒先からゾドンと火が吹いて胸板を打ち貫かれて倒れてしまったともいう。この上和田の激戦で一揆方は、渡辺高綱、久世平四郎、石川十郎左エ門という豪の者を初め数十人討死したが、家康側も鶴殿長祐、宇津与五郎等五人が討たれてしまった。雑兵の討死する者も少くはなかったほど、大きな犠牲を双方出したのであった。家康も心中暗胆たるものがあつたろう。戦の最中家康は夢中になつて拳で鞍の前輪を叩いて下知していたので、岡崎城へ帰つても、指の節から血が未だにじみ出ていた。家康が甲冑を脱ぐと、鎧に敵の放った鉄砲の弾が二発留っていたのには近侍も驚いたが、幸い鎧が堅固だったので何の負傷もなかった。武運の強さに目を真赤にしてよろこんでいた。

|   |   |
|---|---|
| 絵 | 連 |
| 話 | 続 |

# みんなの法然さま

——片目の魚——

高橋良和

さしえ 小林健造



わざわざいはどこに待ち伏せているかわからないのが世のな  
らわしである。

夫婦の間に仏のさずかり子のような一子を得たのもつかの  
間のことである。この勢至丸の父の時国なる人が同じ土地に  
住む定明(さだあきら)なるものにうらみをうけることになっ  
たのであるから、昔の武士のならわしからするとその結論は  
結局刀による解決しか仕方がないことになるのもその道理  
で、おぼろ月夜の影法師が長く尾を引くある夜のこと、この定  
明なるものが突然この勢至丸の邸に乱入してきたのである。

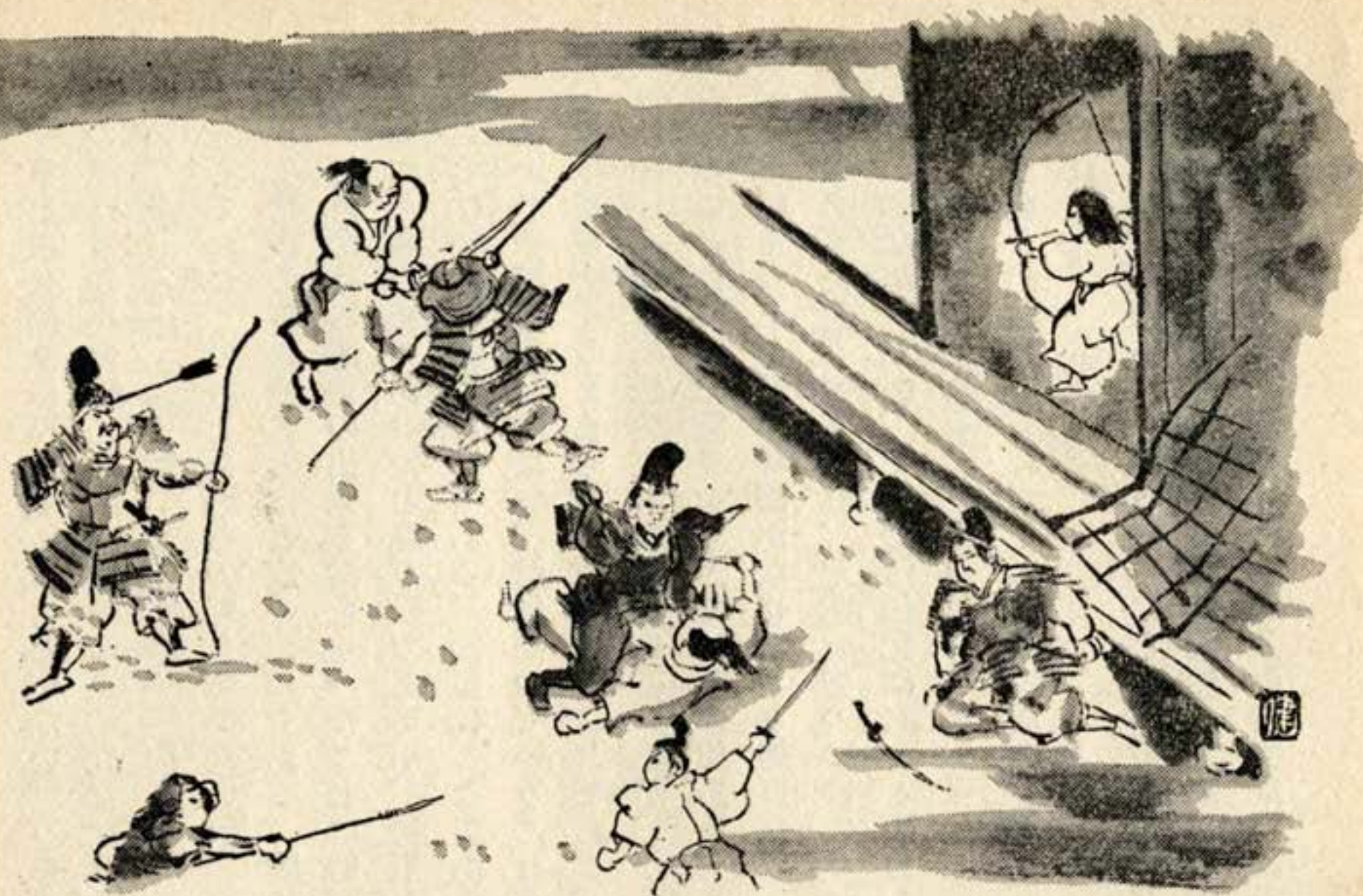
「おのおの油断あるな」

「出合え 出合え」

と味方とも敵ともわからぬままにこの時国の邸には血なま  
ぐさい風が立ちさわいだのである。

おそらく夜討であるから敵も少人数と思われるが、それに  
しても何分夜のことである。こちらは寝入りばなを踏みこま  
れたとあって、右往左往の大混乱となり、いずれの乱入者と  
もわからぬままに、長刀をとり、刀をたずさえて立ち向った  
ものの、夜うち準備の出来たこの定明のために時国は深手を  
うけて遂にその邸内で斃れたのである。

この不意うちをまのあたりにみた勢至丸は、館のかけから  
自分のあそび道具の弓と矢をとり出して、立ち向う武士の間  
を縫うようにあちらこちらをとびまわるうち、敵の武将らし  
いを見付けて、その額めがけて、矢を射たのである。子供  
の矢ではあったが父の急場を救う一念が通じたのかその矢が  
敵の武将の眉間にあたったというから、如何に武芸に秀でて  
いたかもわかるのであるが、それはそれとして、この武将が



定明であつたから、たちまち、「ものども引きあげ」の声と共に、乱入の武士たちはいずれかに立ち去つたのである。

この定明は立ち去る際に眉間の傷をその邸の門前に流れる川で洗つたということであるが、誕生寺の境内にこのさやかなせせらぎの川が今もなお美しい流れをとどめているが、不思議なことに、この川のなかを泳ぐ魚のなかには片目の魚がある。今もつたえられているのである。その片目の魚というのは定明が眉間を射ぬかれて目の血を洗つたという故事から、この川の魚は片目になつたといわれるようであるが、実はとも角としても、片目の魚などが方々にあるわけではない。面白い語りぐさとなつてつたえられたものである。

夜うちというあらしのあとには、時国が死ぬという、世にも悲しい出来ごとが起こつたのである。

もちろん、定明からうけた傷が因となつて遂に再び立つことが出来ず、他界するのであるが、そのとき、時国はその枕辺に一子勢至丸を招いて後事を托するのである。この勢至丸は九才であつたということである。臨終の父のもとで静かに顔を見合す親と子、その横で涙を拭いながらその遺言を聞く母、ひしひしと迫る親子の情があふれていて、子をもつ人ならこの光景はすぐ吾が身にひき合わされる筈である。

「勢至丸、世のなかにはうらみを報ゆるのに、うらみをも

ってすると永久にうらみは絶えることがない。うらみに報ゆるのにはうらみを越えた広い境地の上に立たなければならぬ。あなたはその心でどうか世のなかを導く人になり、そしてわたしのあとを弔らってもらいたい」

これが父時国の最後のことばとなったのである。臨終にあたって、これだけの遺言の出来る父をもったことは勢至丸としても実にしあわせであったと思うのであるが、勢至丸はただひとことはいと答えただけである。問題はここであると思う。「はい」と答えるだけなら、だれだっていうことが出来るが、その遺言をそのまま守って成人することである。

わたしはいくつもの法然上人の伝記を書いたが、ただ一つこの遺言のことについて意見をもっているのである。

というのはこのとき父の時国がなぜもっと勢至丸に、

「お前は必ず仇をうってくれ、定明をやっつけてくれ」

とこういわなかったか、それなら伝記はもっと面白く脚色出来るのと思うのであるが、事實は、

「かたきをうたないでくれ、そして世のなかを救う人になっ

てくれ」

といわれて、ただ「はい」ということで、それを忠実に守って、日本仏教の大きな光となられた法然上人の心の葛藤を画くのはわたしのような内容のない人間の禿筆ではその表

現がむつかしいことをつくづく痛感するのである。「かたきをうってくれ」といわれてかたきをうちに行つたところが、その人間味にほだされて遂にかたきをうたずに終るというような所だと、実は文学にする上にも非常に面白く興味をひくように綴れるのであるが、遺言通り、それを守つた法然上人の心のうち側を表現するにはつたない筆ではあらわし得ないからなのである。この九才の勢至丸は人生の一大転機にぶちあたつたのであるが、そのとき、この少年の心を大きく育てたのが母の存在である。この母なかりせば勢至丸から法然上人のコースは生まれてこなかったかもしれないと思うのである。この母を秦氏（はたうじ）というが終始この勢至丸を激げまし、そして便りをおくり、成人することを心待ちして郷里にいたのであるが、勢至丸もこの母の激励の手紙をいつもふところに入れて勉学にいそしむのである。そこで父の遺言を実現するためにまことに都合のよい師を得たのである。それが母の秦氏の弟にあたる近くの菩提寺という寺の住職である観学得業という学僧であつたのである。おそらく天台の系統の学問をした上に法相（ほっそう）の学をおさめた人であると思うが、この学僧にあずけていよいよ出家の道に入るのであるが、この山寺への避難がいよいよ明日の法然上人への出発となるのである。

## 編集後記

○二月は仏ねはんの月であるが、又浄土宗の二祖上人（鎮西）の忌月でもあります。この機会に、因縁深い筑後、善導寺法主の宮本上人に玉稿を頂いた事は、誠に意義深いことと、厚く御礼申し上げます。

○一月十五日には、読売ランドの月例法要に岸信宏門主が導師をされました。成人の日とて参詣者も多く、随喜の僧侶、信徒方も多く、春の日ざしの中での賑やかな法要となりました。大正大学の茶道部や、音楽部も参加して花をそえていました。

○三日が節分、四日が立春。梅一輪一輪ごとの春ともなれば、もうすぐ御忌です。新年号からは、高橋先生の

法然上人伝が、美しい絵と共に、連載され始めました。ご期待下さい。絵は小林健造氏です。

○絵と言えば、表紙も松濤遠文先生の絵となりました。大分前に一度お願いした事がありますが、今や画笔も油が乗り、大いに楽しんで頂けると思います。誌面も、正月号からは大分、易しくなってきた事にお氣付きかと思えます。

○文京区の淑徳学園の校長に静永孝英先生が就任されハツラツと活躍中です。十二月号に随筆を頂きながら幸英とミスしました事を、お祝い旁々お詫び申し上げます。

○編輯部の三十周年記念に当つての努力が結実してか読者も漸増してきて喜ばしい限りです。御意見もいろいろと頂いて有難いことで

す。本文にも入れましたがその後のを、ここに入れさせて頂きます。

~~~~~○~~~~~

○誌面が易しくなり、童話なども入って、大変有難いと思つています。更に、子供のページを入れて頂いたら、よいのではないでしうか。子供が喜んで読めるものをと考える次第です。

（大田区の一読者）

○「浄土」も三十才の壮年期に入り、もし万一のびなやみがあるとすれば、その編集方法、即ちその読者層を僧職におくか、檀信徒を中心とするか、「浄土」自身の不徹底さにも、一因があると考えます。「信仰相談」なども必要ではないでしうか。檀信徒によるこばれる「浄土」と、皆様の苦勞を考えず、一言申し上げます（文京区、鈴木俊善）

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

（送料 六円）

会費一力年 金七二〇円

（送料 不要）

浄土 二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十一年一月二十五日 印刷

昭和四十一年二月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四番

振替東京八二一八七番

# 大正大学

学長 佐藤 密雄 東京都豊島区西巢鴨四丁目

- 特色 1. 東と西、右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従って、穩健中正、操守高き学生を育成する事を目標とし、教授凡てが身を以て指導している。
2. 学生は、入学と同時に専攻別による13の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか、研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

専攻 文学部＝国文学・英文学・史学・西洋哲学・宗教学・中国学・社会学・社会事業の8専攻  
 仏教学部＝仏教学・梵文学・天台学・真言学・浄土学の5専攻  
 大学院＝修士コース、博士コース（仏教学・宗教学・国文学）  
 カンセリング研究所＝研究生・聴講生若干名

男女共学、試験科目は、国語（漢文をふくむ）社会（倫社・政経・日本史・世界史・地理のうち一つ）外国語（英・独・仏のうち一つ）

試験期日 第1次 2月25日・26日（金・土） 詳細は入学案内  
 第2次 3月28日・29日（月・火） を参照のこと

## 浄土トラクト

|             |              |              |                          |
|-------------|--------------|--------------|--------------------------|
| ものいう石       | 大正大学<br>教授文庫 | 竹中 信常著       | 新書判 価 150円<br>150P 下 40円 |
| 諸仏の戒め       |              | 村瀬 秀雄著       | B6判 価 5円<br>4P 下 10円     |
| 四季の寺まいり     | 大正大学<br>助教授  | 安居 香山著       | 新書判 価 25円<br>20P 下 10円   |
| 経本浄土宗檀信徒用   |              | のおつとめ 村瀬 秀雄編 | 価 90円 下 20円              |
| 選択集私解       | 大正大学<br>教授文庫 | 竹中 信常著       | 新書判 価 120円<br>120P 下 30円 |
| 一枚起請文をめぐって  |              | 村瀬 秀雄著       | 新書判 価 120円<br>102P 下 30円 |
| 真理のはなたば     | 大正大学<br>教授文庫 | 佐藤 良智著       | 新書判 価 70円<br>下 20円       |
| ご法語のしおり 葵ぐさ |              | 村瀬 秀雄著       | B6判 価 15円<br>16P 下 10円   |

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に（多数申込みには）  
 真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に 割引いたします

発行所 法然上人鑽仰会 電話 (262) 5944  
 振替 東京 82187